

## 木下杢太郎の欧米体験（4）

Mokutaro Kinoshita in America and Europe (4)

鈴木 秀治

SUZUKI Hidehru

愛知大学国際コミュニケーション学部

### Abstract

Mokutaro Kinoshita (1885~1945) was a doctor, but, on the other hand, wrote many poems and novels, and also painted. He went to America and Europe for medical study and was given a great stimulation by foreign culture. I am engaged in consideration of the influence which these experiences in America and Europe had on his work.

## XVI. スペイン・ポルトガル旅行と『えすばにや・ぼるつがる記』

木下杢太郎は1924（大正13）年5月26日パリを出発、スペイン・ポルトガル旅行に出た。約1か月半にわたる旅であった。以前にとりあげた、エジプト旅行、イタリア旅行は観光の性格が強く（「埃及、以太利の三ヶ月は全くの遊山に候」1923（大正12）年5月1日付河合浩蔵宛書簡）はっきりした目的をもたなかったが、今回の旅行はかの地でキリシタン文献を渉猟するという明確な目的があった。ロンドン以来の南蛮熱の高まりが仕向けた旅であり、杢太郎のライフワークのひとつであるキリシタン研究に少なからぬ貢献をした旅である。きわめて個人的な旅行であるとともに、杢太郎の後半生に影響を及ぼした旅行でもあった。欧米留学の最後を飾るこの旅の持つ意味は予想以上に大きなものである。

スペイン・ポルトガル旅行のきっかけについては、杢太郎の著作『えすばにや・ぼるつがる記』（岩波書店、1929（昭和4）年）の「序」に詳しい。少々長くなるが引用しておこう。

大正十三年の六月には仏蘭西を立つて帰朝する積りで、既にマルセイユからの船室をも予約して置いたが、本文にも記したやうに、急に<sup>（スペイン）（ポルトガル）</sup>西班牙葡萄牙への旅行を思ひ立ち、帰朝を延ばし、船を換へた。それは西葡両国に行く為のいりめ〈入目、費用のこと〉の出る見込が付いたからである。わたくしは欧羅巴、殊に伊太利亜、仏蘭西に於いて多くの古寺院を訪ね、又しばしば旧教の儀式を観る機会があつたので、久しくうち忘れてゐた日本に於ける天主教の歴史に関する傍業的研究の事を想ひ出した。之れより先<sup>（ベルリン）</sup>独逸伯林の一書肆で偶然フランシスカン派僧オットオ・マアスの著書「スパニエン」〈杢太郎は『スペイン記』の書名を与えている〉を購ひ、またその後巴里に於てこの方面の研究の書二三を繙いて、西葡に対する<sup>（ゆうし）</sup>游志がいよいよ切になつたのである。（中略）

さてその地に行つて見ると、それ等の史料は思ひの外に豊富であつた。珍奇な古書、希有な史料の類が、専門外の我等にも極めて容易く手の触れるところに存じてゐた。是れ予が旅行記に柄にもなきペダンチズムの臭を加へた所以である。（引用における〈カッコ〉内は筆者の注、以下同様）

文中に見られる「日本に於ける天主教の歴史に関する傍業的研究」とは、キリシタン研究を意味する。杢太郎にとっては医学が本業であるゆえ、キリシタン研究を傍業的研究としたのである。杢太郎は師である森鷗外にならい、医学を本業とし、文学を傍業とする人生を選択していた。キリシタン研究は純粹な文学ではないが、文学への興味から発して歴史研究に進んだものである。

ここで、文中にあるオットー・マースの『スペイン記』について簡単に説明を加えておこう。杢太郎は、『えすばにや・ぼるつがる記』の「外篇」において「西班牙の風物と其国の植民伝教史（オットー・マース師が西班牙記）」なる文を書いている。これによると、マースはミュンステルの高等学校で学んだ伝教史に感激を受け、その方面の研究に深入りするべく、その史料をスペインの古文書館に求めようとした。マースは1914年7月30日にフランスから国境を越えてイルンの駅に着いた。数か月の旅行の予定は4カ年に延びた。その代わり著者はその目的である伝教史研究の上に予期以上の収穫を得たのみならず、またよくスペインの風物を楽しみ、その人情を知ることができたのである。

杢太郎はこの『スペイン記』によってスペイン各地の文書館（アルチボス）に関する知識を得たのだし、またセビーリャのインディアス古文書館を訪れたのも、同書の誘いによるものなのである。杢太郎はこの書を「学術的の書ではないが、自然人生に対しても同情のある一学究の精緻なる観察と並びに其温雅の文体に由り、風土記又は旅行記としても甚だ興味がある」と高く評価している。オットー・マースの『スペイン記』は、杢太郎にとってスペイン旅行のよい手引きとなったことは忘れてはならないだろう。

ところで、杢太郎が『スペイン記』を入手したベルリンに滞在していた時期は、1923（大正12）年8月から12月までの5カ月間である。実は、この時期に書かれた手紙の中で杢太郎はスペイン行きを明言している。原善一郎夫妻宛8月31日付の手紙がそれで、原善一郎は実業家原三溪の息子で、同年1月から4月半ばにかけてのエジプト・イタリア旅行のスポンサーは原家であり、夫妻は旅行に同行した（XII. 旅への誘い、参照のこと）。

ただし、この手紙は『木下杢太郎全集』第23巻の書簡集には収録されておらず、『木下杢太郎日記』第2巻に収められている（手紙の控えであろう）。ところで、この手紙の内容は、少し整理した形で「伯林より」という文章に書き直されているので、そちらの方を見ると、「スペインの旅は羨ましく思ひます。小生も来年の春か夏には是非往きたいと思つてゐます」と書かれている。これによって、旅行の前年の夏には、もうスペイン行きを決めていたことが知れる。

さて、杢太郎がこの旅行に携行したもう1冊の旅行記がある。それはフランス・ロマン派の詩人・小説家テオフィル・ゴーチエ（1811-1872）の『スペイン紀行』（1845年刊、ただし杢太郎は1843年と記している）であった。これは1840年5月から10月にかけて5ヵ月あまり、ゴーチエがスペインを旅行した時に書かれた紀行文である。28歳から29歳にかけて、ゴーチエがその若々しい探究心をもってスペイン各地を観察した報告となっている。もちろん、これはキリシタン研究とは無縁だが、スペイン旅行のよいガイドブックとなったことは間違いない。ただし、杢太郎がどんなきっかけで、この『スペイン紀行』を手にしたかは不明である。

1924（大正13）年3月に、杢太郎はスペイン・ポルトガル旅行を間近に控え、スペイ

ン語とポルトガル語の勉強を始めている。同年3月11日付正子夫人宛書簡にその旨が書かれている。

西班牙の本をよまねばならぬ必要上西班牙語を始めたがこれは仏蘭西語よりやさしい。(中略) 5月中西班牙と葡萄牙へゆく。時間があつたら葡語も15時間ばかりレッスンを取りたいと思ふ。

パリでの研究生活もあと少し、スペイン・ポルトガル旅行の準備も着々と進んでいる様子がうかがわれる。フランス語に熟達した杢太郎にとって、おなじロマンス語であるスペイン語やポルトガル語はさほど難しくは感じられなかったであろう。「レッスン」は以前利用したことのある語学学校のベルリッツのことをさす。

これから、スペイン・ポルトガル旅行を扱おうと思うのであるが、この旅行を扱うにはいくつかの困難がつかまとう。まず、旅行の行程を調べる資料が少ないことである。そのための資料としては、『えすばにや・ぼるつがる記』におさめられた紀行文「えすばにや記」と「ぼるつがる記」、さらに『木下杢太郎日記』第2巻しかない。不思議なことに、『全集』第23巻の書簡集には、スペイン、ポルトガルから投函された書簡は1通も掲載されていない。つまり、この旅行中に杢太郎は手紙をまったく書かなかったと思われるのである。あの筆まめの杢太郎が旅行中に一通の手紙も書かなかったのは、それだけキリシタン文献探索に集中して時間をさいていたことの証左かもしれない。

さて、スペイン・ポルトガル旅行の収穫は、杢太郎の『えすばにや・ぼるつがる記』1巻に集約されているとあっていい。ただ、これが一般の旅行とは異なり、キリシタン文献渉獵の旅だったことはすでに述べたとおりである。したがって、一般の旅行記を扱う時のように、杢太郎の紀行文を味読しながら、彼がスペイン・ポルトガルの各都市をどう観察したか、どのような印象をもったかを解説するだけでは不十分であろう。少なくとも、そのキリシタン文献探索がいかなるものだったかを示す必要がある。これがそう簡単なことでないことは、少し考えてみればわかる。それが第2の困難である。

杢太郎はスペイン、ポルトガルの図書館や古文書館を訪れて、まだ日本では知られていないキリシタン文献を借り出して、重要な個所を筆写し(当時はまだコピー機がなかったので、筆写するか写真撮影するしかなかった)、その文献の書誌を作った。文献に添える写真を撮影するとともに、詳しい文献の解題を作成した。仕事の内容は、どの図書館・古文書館においてもほぼ同じであった。さらに付け加えれば、各文献はスペイン語やポルトガル語あるいはラテン語で書かれていて、杢太郎にとって必ずしも読解が容易なものではなかった。

つまり、紀行文「えすばにや記」と「ぼるつがる記」には文献学的研究の部分が相当に

入りこんでいる。この部分は純然たる文献考証であり、杢太郎の歴史学者としての力量を示すものであるが、一般読者にとってはいささか煩雑で通読するのもそう簡単ではない。とくに、「ぼるつがる記」に収められた「リスボン」では、その傾向が顕著である。杢太郎は「序」の中で、文献探索において多くの収穫があったので、「予が旅行記に柄にもなきペダンチズムの臭を加へた」と述べているのは、その辺を説明したものである。

そうした実例を取り上げてみても、ただ文献の考証が続くだけであるから、このテーマに興味のある読者には、むしろ『えすばにや・ぼるつがる記』そのものを読んでもらう方が早道である。それゆえ、ここではまず、あまり知られることのない『えすばにや・ぼるつがる記』の目次を示して、詳しい注を加えることとする。さらに、知られる限りでスペイン・ポルトガル旅行の行程を示しておこう。つぎに、文献渉猟の実際を伝える典型的な文章を一つ取り上げてみよう。最後に、いわゆる旅行記の部分から杢太郎のスペイン・ポルトガル体験のいくつかを選んで紹介することにしよう。

## XVII. 『えすばにや・ぼるつがる記』の目次および詳注

### 『えすばにや・ぼるつがる記および初期日本吉利支丹宗門に関する雑藁』目次

#### 序

#### 西葡前記

リュウ・ド・セエヌ

アンリ・コルヂエエ教授

ボルドオ

#### えすばにや記

サン・セバスチアン

ハビエルの城

サラゴツサ

マドリイ市

アルカラ

トレド

コルドバ

セビイア

シマンカス

## ぼるつがる記

リスボア

コインブラ

## 外篇

日本の発見

日本に於ける吉利支丹の運動

アレツサンドロ・ワリニヤニ師の第二回の来朝

千五百九十年マカオに於いて印刷せられたる一書に関する解題（メチナ氏著笠井鎮夫氏訳）

十六世紀末澳門及び日本に於ける活字出版（デ・フレイタス氏著岡本良知氏訳）

アジユダ文庫に在る日本関係の未刊書に関する覚書

ガイドオ・グワルチェリが日本使節記に就いて

ポルトガルロ、スペインよりイタリヤへ（グワルチェリ日本使節記の抄訳）

四遣欧使節の帰朝（岡本良知氏訳）

支倉六右衛門の事附アマチが「奥州記」

西班牙の風物と其国の植民伝教史（オツトオ・マアス師が西班牙記）

## （注）

『えすばにや・ぼるつがる記』の表題は詳しくいうと、あとに「初期日本吉利支丹宗門に関する雑藁」が付け加わる。目次の「外篇」がその「初期日本吉利支丹宗門に関する雑藁」に相当する。つまり、本書は単なるスペイン・ポルトガル紀行文集ではなく、後半にキリシタン研究論文集を含んだ著書ということになる。同書の紀行篇にあたる「西葡前記」「えすばにや記」は大阪毎日新聞に掲載された。ただ、同じ紀行篇でも「ぼるつがる記」は分量も多く（とくに「リスボア」）内容も学術的で新聞には適さないので、雑誌『思想』に発表されたものである。

「西葡前記」はスペイン・ポルトガル旅行以前の文章だが、キリシタン研究と関連するものも含まれる。「リュウ・ド・セエヌ」はパリの通りの名前、空太郎はこの通りにある古書店で、何冊かのキリシタン文献を入手した。それらは、アマチの『奥州記』、アンリ・コルジェの諸書目、シャルルヴォワやパジェスの『日本史』など空太郎の研究にとって欠くべからざる書物であった。さらには、のちに空太郎が邦訳出版することになるガイド・グワルチェリの『日本遣欧使者記』（1586年ローマにて出版）もこの店で購入したものである。

「アンリ・コルジェエ教授」は、いま名前をあげたフランスの学者で東洋学の権威であっ

た同教授を訪問した記録である。教授はドゥアルテ・デ・サンデが天正遣欧使節の紀行（のちに詳しくとりあげる）をラテン語でつづった著書（ロンドンの大英博物館に所在）のファクシミリを作ったと言って、書棚を探してくれたがどうしても見つからなかった。

「ボルドオ」ではスペインに入国する前に訪れたボルドーの街の印象を記している。さらに、ボルドーの女の美しさをほめたたえたゴーチエの『スペイン紀行』の一節を引用している。また、ボルドーの医科大学の寄生病学主任S氏の教室を訪れている。同じく皮膚病学の教室にデュブリユ教授を訪問している。

「えすばにや記」は文字通りスペインの紀行文である。いくらかの前後はあるが、目次に記された順にスペインの諸都市を訪れた。柰太郎はスペインについていくつかの興味深い紀行文を残してくれた。キリシタン文献探索の点でとくに成果があったのは、マドリード（国立図書館と王立史学院）とセビーリャ（インディアス古文書館、セビーリャ文科大学図書館およびコロンプス図書館）であった。

「ぼるつがる記」は同じようにポルトガルの旅行記である。ポルトガル旅行の手掛かりは、リスボンとコインブラの紀行文だけである。『木下柰太郎日記』にはポルトガルの記事は見当たらない。ポルトガルでこれ以外の都市を訪ねたかは不明である。リスボンおよびその郊外ではかなりの収穫があり（国立図書館およびアジュダ文庫）、文献考証が延々と続いている。

「外篇」は前に述べたように、主としてスペイン・ポルトガル旅行で得られた資料に基づいたキリシタン研究の成果である。

「日本の発見」は本文には「附、鉄砲伝来の事」という副題がある。題の意味は、日本は神代からの国であるけれども、ヨーロッパ人の眼から見れば新しく発見された国だということである。その例として、鉄砲伝来に関して、自ら種子島に鉄砲を伝えた一行の一人と称しているポルトガルの冒険商人メンデス・ピントーを取り上げて紹介している。その書『東洋遍歴記』は現在では完訳が出版されている（平凡社東洋文庫）ので、柰太郎の紹介は資料的な意味は持たないが、彼が「ピントオの説く所は縦令自家の経験でないとしたところで、日本を知る人の記録として考へて不可はない」といって「日本の発見」のひとつと見なしているのは興味深い。

「日本における吉利支丹の運動」は、日本におけるキリシタン宗門の歴史を4つの時期に分けるのが便利であるとして、第1期・天主教の伝来及び隆盛の時代、第2期・衰微の時代、第3期「宗門剿滅」の時代（剿滅は「ほろぼしつくすこと」の意味）、第4期・「復活」の時代、をあげている。内容的には第1期が本文の大部分を占め（46ページ）、第2期は6ページ、第3期と第4期は姉崎正治や浦川和三郎などの研究に学んで、時期を命名しただけで内容には触れていない。第1期は相当な分量があり勉強の成果が見られるが、全体としては柰太郎自身が認めているように、「主として事実の羅列に止まつて、思



想的又文明史的観照には欠くる所が多」く、まだ研究半ばという感じがする。

「アレツサンドロ・ワリニヤニ師の第2回の来朝」は、イタリア生まれのイエズス会士として日本でもよく知られたヴァリニャーニ（『岩波西洋人名辞典増補版』の表記に従う）についての論文である。ここでは第2回の来朝と書いているが、それは第1回の誤りであった。杵太郎はこの文章を『日本吉利支丹史鈔』（中央公論社、1943年）に再録するときに、その誤りがなぜ起こったかを説明し、そのタイトルも「第1回」に改めている。その第1回目の来朝を豊富な資料を用いて解き明かした労作である。

「千五百九十年マカオに於いて印刷された一書に関する解題」（スペイン語）および「十六世紀末澳門及び日本に於ける活字出版」（ポルトガル語、なお「澳門」はマカオと読む）はいずれもマカオに縁のある歴史的文書の解題を翻訳紹介したものである。杵太郎自身はスペイン語とポルトガル語から邦語訳をすることができなかったため、笠井鎮夫（スペイン語）と岡本良知（ポルトガル語）という二人の専門家に邦語訳を依頼したものである。

「アジュダ文庫に在る日本関係の未刊書に関する覚書」は、ポルトガルのアジュダ文庫におさめられた日本関係の未刊行書についての文献解題である。杵太郎はこれら未刊行書が多数あることを知り、日本におけるこれらの刊行が有意義なことをすでに説いていた（「ぼるつがる記」所載の紀行文「リスボア」）。

「ガイドオ・グワルチェリが日本使節記について」は、天正遣欧使節についての重要な文献であるガイド・グアルチェリ著『日本使節記』（以前に述べたように杵太郎はこの書物をパリの古書店で入手していた）についての解題である。著者のグアルチェリはイタリアの文学者であり、当然ながら本文はイタリア語で書かれている。本書の原題は「日本の使節のローマ到着よりリスボン出発に至るまでの物語。ならびにその通過せる諸地においてキリスト教徒の諸侯が彼らを歓迎したこと」というきわめて長いものである。杵太郎は同書の完訳をめざし、東北大学のドイツ人女性教師でイタリア語に熟達したマルクワルト嬢の助力を得て、『日本遣欧使者記』と題して1933（昭和8）年に岩波書店から刊行を果たした。

「ポルトガルロ、スペインよりイタリアへ（グワルチェリ日本使節記の抄訳）」は、カッコ内に記してあるように、文字通りグワルチェリ『日本遣欧使者記』の抄訳で第5章と第6章の邦語訳である。

「四遣欧使節の帰朝」は、先述のアジュダ文庫の未刊行の写本（ドン・マンシオ・伊東その他3人の青年が長い旅路を後にして、ヴァリニャーニ師に連れられて久しぶりに日本に帰着したことを記す紙片数枚の記録）を邦訳したものである。これは杵太郎が写本から筆写したものであると思われる。原文はポルトガル語であり、訳者はさきほど名前の出た岡本良知である。



「支倉六右衛門の事附アマチが『奥州記』」は、1から3までの数字をふって3つの部分に分けられている。まず1「支倉の使命に関する文献」は、杢太郎が以前から興味を抱いていた支倉六右衛門常長（慶長遣欧使節）に関する文献解題である。いままで支倉の手帳19冊（遣欧使節の道中記らしきもの）の存在が伝えられているが、それらは紛失してしまった。支倉の欧州旅行のことは、いまでは主としてヨーロッパの文献に頼るより仕方がない。こう記してから杢太郎は、大小ひっくるめて27点の文献を紹介している。その16番目に取り上げられているのがシピオネ・アマチ著『奥州記』である。これを杢太郎はパリの古書店で入手したことは以前に述べておいた。

ここで、アマチについて『岩波西洋人名辞典増補版』の説明を借りると、この人物は「17世紀初めのイタリア人。支倉六右衛門の訪欧中、一行と共にスペインを経てローマに入り、教皇謁見の際には通訳をした。当時の模様を記録した『奥州記』がある」。

2は「学士シピオネ・アマチが奥州記」は、この著書の概要を示すために、第1章から第31章にいたる目次をすべて邦訳して掲げている。たしかに、目次を見るだけでも同書の大体の内容は見当がつく。同書前半は奥州国に関する説明から始まって、スペインの宣教師でフランシスコ会士ルイス・ソテロの活動を扱っている。後半は支倉の使節一行がスペインを経て、イタリアのローマに到着、教皇パウロ5世に謁見するまでを記している。

3は「奥州記の抄訳」は、文字通り『奥州記』全巻にわたるよく整理された抄訳で、これを読むと同書の内容はほぼつかめるように工夫してある。しかしながら、この抄訳は本邦初めての試みではなかった。つまり『大日本史料』第12編の12に支倉に関する多数の文書が引用されており、アマチの書は杢太郎と同じ目的のためにすでに抄訳されていたのである。杢太郎は後になってそれを知り、「もしわたくしが早くその書を見たら、本稿、殊にアマチの書の抄訳をば試みるやうなことはなかつたであらう」と書いている。

「西班牙の風物と其国の植民伝教史（オットオ・マアス師が西班牙記）」についてはすでに述べた。ここではオットー・マースの『スペイン記』のたんなる紹介で終わらないで、興味深いエピソード（セビーリャでの）などを交え、同書のおおよその抄訳となっている。杢太郎は同書を「趣味と実益とを与へたる」書と賞賛している。

## XVIII. スペイン・ポルトガル旅行の行程とその内容

以下、得られるかぎりの資料を参照しつつスペイン・ポルトガル旅行の行程とその内容を示しておこう。以前に述べたように、そのための資料としては、まず『えすにばにや・ぼるつがる記』におさめられた紀行文「えすにばにや記」と「ぼるつがる記」があげられる。これには各都市滞在の日付が記されていることが多い。さらに『木下杢太郎日記』第2巻にも、スペイン滞在時に書かれた日記がほんのわずかだが残っている。『日記』にはポル

トガル滞在時の日記は見られない。さきほども述べたように、この旅行時には手紙類は一切残っていない。以下の日付はいずれも1924（大正13）年のことである。

5月26日 朝の8時12分の汽車でパリを発って、同日午後6時頃ボルドーに到着。ボルドーで一泊。

5月27日 ボルドーを発ってイルンでスペインに入る。ここから電車でサン・セバスティアンに行く。フランシスコ・ザビエルの出生地を訪れるために、翌朝、パンプロナに向かうことにする。サン・セバスティアンで一泊する。

5月28日 サン・セバスティアンを朝7時40分の電車に乗り、午前10時にパンプロナに到着。市内見学。午後2時50分の電車でサンゲエッサに着く。馬車でザビエル城に到着し城を見学する。城のうち昔のままであるのは、石の段と2枚の鉄の扉、家族の礼拝堂、それからその本尊たる十字架像であった。この地で一泊。

5月29日 午前中、再びザビエル城に行く。せっかくのザビエル城の見学であったが、あまり印象に残るものではなかった。午後、パンプロナに戻る。ここで一泊。

5月31日 午後、サラゴサに着く。市内見物。2回にわたる日本の遣欧使節の足跡を訪ねるために、わざわざサラゴサに途中下車したのである。この地に泊ることなく夜行でマドリードに向かう。パンプロナからマドリードにいたる期間は、「えすばにや記」と『日記』で日付が食い違う。ここでは「えすばにや記」の日付に従っておく。



図1 ハビエル城



図2 サラゴッサの或る家

6月1日 朝9時過ぎにマドリード着。当日宿について荷を下すとすぐ、国立図書館に行く。最初の2日間は図書館に通った。日本に関する書としては、希有の珍本というようなものを発見しなかった。書目をコルジェの欧文日本関係書目と比較すると、それにないような本はほとんど見られなかった。ただ、ドゥアルテ・デ・サンデが天正遣欧使節の紀行をラテン語でつづった著作のスペイン語訳を見出した。柰太郎がラテン語原本に出会うのは、セビーリャの文科大学の図書館においてである。

6月3日 プラド美術館を見学。ベラスケスに驚嘆し、ほかにゴヤやエル・グレコなども見る。柰太郎はマドリードに合計で1週間以上、すくなくとも10日間は滞在していたと思われる。

6月4日 市内の古書店ビンデルに行く。かなりの珍本を蔵している店であった。ことに東洋に関するものは2回の書籍目録に網羅されている。柰太郎は同地の図書館で初めてこのカタログの存在を知った。その書籍目録を購入しただけで、古書は買わなかった。

6月6日 闘牛を見物する（のちに詳述する）。また、紀行文「アルカラ」には、同じく6日にこの小市を訪ねたとあるが、闘牛見物とアルカラ行きが同日とは考えにくい。アルカラ・デ・エナレスはマドリードから東に30キロメートルにあり、ルネサンス期は大学都市（コンプルテンセ大学）として栄えた街である。この地を訪れた動機は、サラゴサと同じく、天正遣欧使節および支倉常長（慶長遣欧使節）が通過した土地だからである。アルカラ行きは、ただこの市の外観を見ただけで終わった。その外観とは、「今は唯荒村であるが、コロナアド作りの家並、亜刺比亞風の景物に、この国ならではの見られぬ趣があつた」というものであった。

6月7日 イタリア王がスペイン王宮を訪問した日である。朝アルカラに行く予定だったが、イタリア王の行列に出会って、駅に行くことを断念したと書かれている。してみると、アルカラ行きは8日以降だったのではないかと推定される。



図3 アルカラの或る小路

6月13日 トレド訪問。8日から以後13日まで旅の記録がない。この日にマドリードを発ってトレドに向かったと推定される。このトレドで1泊。トレドは2回の遣欧使節が訪れた都市であるが、柰太郎はそれに触れていない。彼がトレドを訪れたわけは、エル・グレコの名作「オルガス伯爵の埋葬」を見るためであった。トレドで柰太郎は詩的な紀行文を書き残している（のちに詳述する）。

6月14日 朝トレドを出発して、夕方コルドバに到着。宿に荷物を置くと、すぐ市街の見物に出かける。この街で1泊する。コルドバはキリシタン研究とは直接関係がない。

6月15日 コルドバのカテドラル（メスキータと呼ばれることが多い。元はイスラム教のモスクで、13世紀にキリスト教の聖堂に転用、特異な建築物として有名）を見学。この日のうちにコルドバを発ち、夜9時過ぎにセビーリャ到着。柰太郎がセビーリャを訪れたのは、スペインの宣教師でフランシスコ会士ルイス・ソテロの生地であることと、そのソテロに伴われてスペインにきた支倉六右衛門一行がこの地で厚い歓待を受けたからである。また、キリシタン関係の貴重な文献が保存されているという理由もあった。

6月16日 インディアス古文書館を訪れる。「インディアス」はスペインの植民地の総称なので、柰太郎のように「印度古文書館」と呼ぶのはやや不適切である。しかし、のちになって、「印度」というよりも「植民地」と直した方が理解しやすいと説明している（「西班牙の風物と其国の植民伝教史」）。この古文書館でいくつかの珍しいキリシタン文献を掘り出している。

6月19日 この日は「聖体の祝日」である。柰太郎にとって日曜日以外に祝日があるのは大敵であった。スペインでは1日に4、5時間しか公共の建物が開かれていない。祝日は閉館するので、肝心のキリシタン文献探索の仕事ができないからである。とはいえ、この日は仕事を休んで、祭典の行列などを見物した。日時は不明だが、セビーリャではアルカサル宮殿を訪問している。この「全く亜刺比亜風の宮殿」を見学して、まだ見ていないアルハンブラ宮殿のことを想像している。

このあと、柰太郎の行動を示す記事がきわめて少なくなる。セビーリャに何日滞在したかは不明だが、古文書館や図書館でかなりの収穫が得られているので、すくなくとも1週間以上は滞在したと推定される。このあと、柰太郎はセビーリャから列車でポルトガルのリスボンに向かったのはたしかである。リス



図4 コルドバの或る街道



ボンでは多くのキリシタン文献を発掘しているの、ここでもある程度の日日ひにちにわたって滞在したと推定される。

ところで、紀行文「ぼるつがる記」に記されている日付は、コインブラ滞在の6月26日から29日のみである。杢太郎がリスボンに到着した日日は記述がない。ただ、セビーリャ～リスボン間には急行列車の便がなく、普通列車を何度か乗り換えるしかなかった。そのため、セビーリャを朝7時10分に発って、リスボンに着いたのは翌朝のその時分だったという。けれども、その到着の日付は記されていない。

セビーリャからリスボンまでの移動はそうとうの苦勞だったわけだが、さらに弁当の用意をしなかったので、24時間ほとんど飲まず食わずであった。そんな悪条件にも耐えて、杢太郎はキリシタン文献渉獵の旅を続けた。杢太郎がこの旅行にどれだけ精力を注いでいたかをよく示すエピソードといえよう。

ところで、「えすばにや記」に含まれる「シマンカス」を見ると、7月7日の朝、リスボンからマドリードに帰着していることがわかる。すると、杢太郎のリスボン到着は6月22日から25日頃であろう。ポルトガルにいる間（約2週間）は、ほとんどリスボンに滞在していて、その間にコインブラを訪れた（6月26日から29日）と推定される。リスボン出発は7月6日の夜となる。日付をまとめてみよう。

6月23日前後？ セビーリャを朝7時10分に発って、リスボンに向かう。

6月24日前後？ リスボンに朝7時10分頃到着。ホテルに着いて5階の一室に落ち着く。窓からこの都第一の大通りを見下ろす。広い街道の中央は鬱蒼とした樹木の帯である。楡を主として、樅、椰子の高い頂がそびえ立っている。道は広く、樹は多く、リスボンの第一印象は清潔の二字に尽くされた。午後、国立図書館に行くがすでに閉まっていた。

夜になるとリスボンは朝とは別の顔を見せる。リスボンは世界中の最も騒々しい都会のひとつであるというガイドブック・ベデカーの言葉どおり、「午前の三四時まで、アヴェニダ〈ポルトガル語で大通りのこと〉に人声が絶えぬ。粗き方石を舗いた道の上を軌る自動車は、すばらしい音響を立てる」のである。

この街では、国立図書館のほかにはアジュダ文庫（アジュダはリスボンから電車で約1時間のところにあり、この古文書館は古写本を多く蔵する）などに行き、キリシタン文献探索は大きな成果を上げた。その結果、「リスボア」は文献学的記述がきわめて多く、『えすばにや・ぼるつがる記』の紀行文の中で、これが一番長くて30ページを占めている。杢太郎のキリシタン研究にかける情熱が感じ取られる文章である。

6月26日 コインブラはリスボンから汽車で3、4時間の行程である。しかし、1日に2回しか往復の便が無いので時間のあんばい按排がむずかしく、杢太郎がこの街に着いたのはすでに薄暮であった。コインブラは何といても、その大学で知られている街である。当地に大学が置かれたのは1308年という。杢太郎のコインブラ行きは、その大学図書館で日本

のイエズス会の歴史と関係ある文献を探すことだった。しかし、数種の写本を借り出して見たものの、目ざす文献を見出すことはできなかった。「コインブラ」については、のちに詳述する。

さて、リスボン滞在が約10日間だとすると、市内には日本ゆかりのサン・ロケ修道院（イエズス会）があるので、この修道院を訪問する機会はいくらでもあったはずである。1584年にリスボンに到着した天正遣欧使節は、同修道院に2週間ほど滞在した。用意周到な杵太朗だから、この修道院を知らなかったとは思えない。しかも、のちに杵太朗が邦訳を手がけるグワルチェリの『日本遣欧使者記』にも、この修道院のことは出ている。けれども、紀行文「リスボア」にはサン・ロケ修道院訪問の記述はない。

7月6日 夜にリスボンを発って、マドリードに向かう。

7月7日 朝に2度目のマドリードに到着。今度はスペイン語が堪能な松井という人物と知り合いになったので便宜が多かった。いつも不得要領に追い返された王立史学院の内部に入ることができた。ここで、ルイス・フロイスの書簡としてそれまで広く知られていなかった日付のものを5通見出している。フロイスの書簡は杵太朗が数え得たところで70余通あるという。「之を一本に集めてフロイシユ全集を作り且つその和訳を得たいものである」と記している。

のちに杵太朗はルイス・フロイスの書簡および年報の一部を邦訳することになる。「大坂城に於ける秀吉（ルイス・フロイス、一五八六年年報）」「ルイス・フロイス千五百九十年日本年報（遣欧青年使節の帰朝及び其後の消息）」「ルイス・フロイス日本書簡一五九一年・一五九二年」「伴天連書簡に現はれたる関白秀次の行状と死と（ルイス・フロイス一五九五年年報）」である。これらの労作が生まれたのも、このスペイン・ポルトガル旅行がきっかけとなったのである。

再びのマドリードであったが、「日と路用とを吝む故に<sup>(おし)</sup>、予は此地に長く再び留まることが出来なかつた。それ故にまた此地に於ける予の歴史的研究も発展しなかつた」と杵太朗は述べている。この文章から判断するなら、2度目のマドリード滞在はあまり長くなかつた。2回の遣欧使節がともに通過したエル・エスコリアル（グアダラマ山南斜面にある壮麗な修道院兼王宮）も訪れてみたが、ツーリストの一行と同じ気分で見終わって、この大観光地には特別の印象はなかつた。

日日不明（シマンカス）<sup>ひにち</sup> 日日は不明だが、マドリードに戻った杵太朗の最後の訪問地はシマンカスであった。かつてのカスティージャ王国の首都バリャドリードに行き、その近村のシマンカスを訪れている（近村とはいえ馬車で2時間かかる）。その目的もやはり古文書館での調査であり、杵太朗の言葉を引くなら、「よもやに引かされてここまで来たのである」。ここで杵太朗が掘り出したものは、めずらしくも日本語の一書簡、しかも支倉六右衛門の署名がある手紙であった（日付は1614（慶長19）年9月30日）。本文は文体

や仮名遣いが今と異なり、よく読み下すことはできなかった。支倉は1614（慶長19）年6月23日にキューバのハバナから船でスペインに向っているが、杢太郎はこの手紙をその船の中で書いたものと推定している。

その後の杢太郎の行動だが、おそらくマドリッドに戻ってから何日かを過ごしたあと、7月の半ばにはパリに戻ったと思われる。『全集』第23巻所載の「書簡集」で、7月27日付以降8月13日付までの書簡によって推定すると、パリに戻って以降は、サンシュルピス広場に面した、杢太郎の定宿であるオテル・レカミエに宿泊していた模様である。

## XIX. キリシタン文献の探索——その足跡を訪ねて（セビーリャ）

これから、杢太郎のキリシタン文献探索がいかなるものであったかを、セビーリャでの体験をとりあげながら見ておこう。6月15日の夜にセビーリャに到着した杢太郎は、あくる日を待ちかねてインディアス古文書館を訪ねた。ここは毎日朝の9時から午後3時まで開いている。前にも触れたことだが、杢太郎によればスペインの公共の建物は1日に4、5時間しか開かれていない。してみると、この古文書館は、他よりも1、2時間ほど開館時間が長いことになる。あまり時間の余裕がない杢太郎にとっては、好都合だったことになる。杢太郎はインディアス古文書館に好印象をいできて、次のように書いている「予の今まで見た西班牙の公共的研究機関のうちではこれほど活動して居り、またこれほど自由の気分に満ちたものはなかつた。（中略）外国の研究者も見物も何等むづかしい条件なしに出入を許される」。

杢太郎は数回この古文書館を訪れたが、全部で4万巻を数える古文書のうちに、日本に関するものはごくわずかしかなかった。わずかに、ルイス・ソテロの書簡数通を見るのみであった。さらには、源秀忠の名においてフェリペ3世の宰相レルマ公爵に宛てた2通の手紙を見出している。そのひとつの御家流<sup>おいせりゅう</sup>の字体が見事なので注意をひかれ、幸いなことに写真で複写することができた。

ここで、『えずにばにや・ぼるつがる記』に数多く挿入されている文献写真がどのようにして撮影されたものかを説明しておこう。スペインやポルトガルの古文書館には専門の写真家がいて、注文に応じて文献の写真を撮ってくれるのである。インディアス古文書館にも2人の写真家がいて、はっきりなしに文書を複写している様子が「セビリア」にも記されている。

さて、次はセビーリャ文科大学図書館の見学によって得られた、ドゥアルテ・デ・サンデの『日本遣欧使節記』（杢太郎の表記による）についての解題である。これは、天正遣欧使節に関する文献としては、まず第一にとりあげられるべき史料の一つとして知られている。なお、デ・サンデの本には邦訳があり、泉井久之助・長沢信寿・三谷昇二・角南一



郎訳『デ・サンデ天正遣欧使節記』雄松堂書店（1969年）がそれである。

杢太郎は、同書のことを新村出の『南蛮記』によって初めて知った。この本は、パリでコルジェ教授を訪問したときに、教授がつくったファクシミリを見せてもらいそこねたものである。その後、マドリードの国立図書館で同書のスペイン語訳に出会っている。ラテン語原本を初めて見たのは、セビーリャ文科大学の図書館においてである。縦19cm半、幅13cm半のサイズで、本文だけでも412ページある。これはロンドンの大英博物館の図書館も1冊所蔵している。さらに、リスボンの図書館が2、3冊蔵しているらしい（杢太郎はのちにリスボンの国立図書館で2冊であることを確認する）。「だから無二の珍本と云ふわけでもないが、我我に取つては興味の深いもので、南蛮文献の複製を作る場合には第一級の範疇に収めらるべきものである」と杢太郎は記している。

これに付記すると、現在、世界に伝わっている諸本は合計13冊である（『天理図書館蔵きりしたん版集成・解説』（八木書店および雄松堂書店、1976年）による）。

杢太郎によると、本文はラテン語で記され、LEO<sup>(レオ)</sup>やLINV<sup>(リノ)</sup>S（九州にある日本人耶蘇教徒）の問いに答えて、MANCI<sup>(マンシヨ)</sup>VS（伊東某）MICHAEL<sup>(ミゲル)</sup>（千々石某）MARTIN<sup>(マルチノ)</sup>VS（原某）などが物語る形式になっている。いわゆる「互いの問答の如く」書きつづったものである。これは当時長崎またはマカオにおいて出版された他のラテン文の書とともに、日本耶蘇教<sup>コレジヨ</sup>学林の学生にラテン語を学ばせ、あわせて耶蘇教の教義および精神を悟らせるための目的で作られたものである。

ここで、杢太郎の説明を補足するために、さきほどの『天理図書館蔵きりしたん版集成・解説』から引用しておく。

少年使節のローマ教皇庁派遣という当時として破天荒の事業を計画し、実現したのはヴァリニャーノであった。1587年、彼はゴアにあって使節一行の帰途を迎え、手元に集められた使節関係の公私の記録その他にもとづいて自らスペイン語で本書を編纂、使節と共に日本に向かう途次のマカオ滞在中、それをイエズス会中国伝道の長老であり、ラテン語に堪能であったデ・サンデに託しラテン語に訳出せしめたのが、本書である。（中略）本書の事実上の著者はヴァリニャーノ自身である。

さらに、この訳者デ・サンデについて、『ブリタニカ国際大百科事典』（TBSブリタニカ）や前述の『デ・サンデ天正遣欧使節記』の解説などを参照しながら、簡単にまとめておこう。ドゥアルテ・デ・サンデ（1531～1600）はポルトガルのイエズス会宣教師で、コインブラで教育を受け、1578年インドに渡り、ゴアの学校で教えた。次いでマカオに赴き、さらに中国の内地に入って布教を行った。マカオに戻ったデ・サンデはここで上司ヴァリニャーニに邂逅した。ヴァリニャーニが日本に送ろうとしていた印刷機で『正しき児童の

教育』（1588年）、本書『日本遣欧使節記』（1590年）を印刷、発行した。これは、中国における最初の欧文印刷物といわれる。デ・サンデの中国名は孟三徳である。

その次に来るのは、第2回の遣欧使者すなわち支倉六右衛門に関する文書である。柰太郎はこう説明している。支倉の事跡を伝える文書は、第1回使節に関するものに比較するといちじるしく少ない。ややまとまったものでは、シピオネ・アマチの『奥州記』（イタリア語）がある。他はみな片片たる小冊子である。日本においても、支倉の史料はわずかなものであろう。

支倉の人物、性格の事もまた知りたい。それは一つには彼を伴ったルイス・ソテロに歴史家的天分がなかったことにも原因するかとも思われる。ルイス・フロイスの書簡は好個の日本史であるが、ソテロの書は商人の覚書に似ている。つづいて、柰太郎は支倉に対して疑問をなげかける。支倉自身においても、はたして前の4人の青年使者におけるような敬虔な信仰、澁刺たる好奇心があったか否か疑わしい。さらに、支倉はむしろ通商の事を議するのが本旨だったらしいと結論づけている。

支倉に対して疑問と興味を抱いていた柰太郎は、セビーリャで少しの手がかりを得た。それは、コロンブスの息子のフェルナンド・コロンが建てたコロンブス図書館にあった。学問好きなフェルナンド・コロンが、ヨーロッパ旅行中に集めた4000冊の書籍が基盤として成り立った図書館である。そこで、支倉に関する2種の小冊子を見つけた。

その一つは支倉がスペイン王に送った書簡の写しであり、もう一つはマドリードのサン・フランシスコ僧院デスカルサス・レアーレス（王室跣足派女子修道院）においてフェリペ3世の玉座の前で、ドン・ディエゴ・デ・グスマンの手から洗礼を受けた顛末を詳細に物語るものである。これらは、ルイス・ソテロがセビーリャにいる兄弟に宛てた手紙を印刷したものであった。ところが、その内容はアマチの『奥州記』の中の記事とほとんど差がなかった。このように、わずかな手がかりも、新たな事実の発掘にはならない場合もある。それでも、セビーリャはスペイン・ポルトガルで訪れた都市の中では、わりあい収穫の多かった部類に属する。

ここで、いま検討してみた「支倉六右衛門に関する文書」（「セビリア」に所載）と、「外篇」に収められている「支倉六右衛門の事附アマチが「奥州記」とを比べてみよう。前者では、支倉に関する文書としてはすでにアマチの『奥州記』の存在にふれているが、その他は片片たる小冊子に過ぎないことを説明しているだけである。ところが、後者では、以前の繰り返しになるが、支倉の手帳19冊（遣欧使節の道中記と推定される）は紛失してしまったと述べ、したがって支倉の欧州旅行を知るためには主としてヨーロッパの文献に頼るより仕方がないと前置きしている。さらに、柰太郎はそうした文献の解題を続けているが、大小ひっくるめてその数はなんと27点を数える。

また、アマチの『奥州記』については、目次の全てを邦訳して掲げ、さらには『奥州記』全体にわたる抄訳を載せている。柰太郎が『奥州記』の内容に通暁していることがよくわ

かる。セビーリャ訪問の時と比べて、研究がはるかに進んでいることに驚かないわけにいかない（後者の文章の執筆時期は不明だが、『えすばにや・ぼるつがる記』の刊行が1929（昭和4）年8月なので、セビーリャ滞在の時よりは数年経過していることもたしかである）。

柰太郎のキリシタン文献探索の旅は、何よりもまず根気のいる旅であった。しかも、時間と費用が限られていた中で、最善の成果を出すには、前もって周到な準備が必要であった。スペイン・ポルトガル旅行は、決して出発の直前に思いついたものではない。ロンドンで南蛮熱が再燃して以来、フランスで医学研究に励んでいる時も、キリシタン研究への情熱は冷めることがなかった。

オットー・マースの『スペイン記』を旅行前年に入手できたことも単なる偶然ではない。柰太郎のキリシタン研究への情熱が、オットー・マースの書を読み寄せたのだといってもいい。パリの古書店で、アマチの『奥州記』、グイド・グワルチェリの『日本遣欧使者記』の2冊を入手できたのも、スペイン・ポルトガル旅行にとって幸運な準備だったといえるだろう。おそらく、決して安い買い物ではなかっただろうが、どうしても必要な身銭を切っても手に入れなければならないのである。

スペイン語とポルトガル語の勉強はいささか付け焼刃だったけれど、やらないよりやったほうが、どれだけましかわからない。実際、その語学が何とか役に立ったのである。筆者もスペインとポルトガルに行ったことがあるが、この2カ国語がラテン語から分化したロマンス語とはいえ、スペインやポルトガルでは、同じロマンス語のフランス語はあまり通じなかった。やはり現地の言葉を勉強することにこしたことはない。とくに、キリシタン文献探索の旅では、スペイン語やポルトガル語を読む必要があるからなおさらである。

## XX. 小説「古都のまぼろし」とセビーリャ体験

さて、ここでセビーリャでの体験をもとにして書かれた小説「古都のまぼろし」をとりあげることしよう。この作品は1925（大正14）年4月1日発行の雑誌『女性』に掲載された。スペイン・ポルトガル旅行、なかんずくセビーリャの記憶が薄れないうちに執筆されていることに注意を促しておく。主人公はセビーリャの文科大学の図書館で未刊行のルイス・フロイス書簡のスペイン語訳の草稿を読みあぐねている。この主人公は、柰太郎自身と考えてよい。

然し自分はそれでも、フロイシユ師が何を物語つてゐるかを察知することが出来た。安土の信長はここで近世人であるかの如く、人間的に写されてゐる。それよりもその子信雄は全く可憐の青年であつた。彼は耶蘇教の清新な人生観に魅せられながら、放

蕩を不徳とする道徳で自責することに堪へなかつた。

ここから、主人公の空想がはじまり、その脳裏にふと「まだわかい、<sup>あて</sup>貴やかな<sup>こうし</sup>公子」の姿が浮かぶ。それは、いまフロイスの書簡で読んでいた織田信長の息子信雄その人である。空想の場面は暮れてゆく春の夕方であった。

信雄はその妻を愛したが、それは単に彼の妻であるという理由からにすぎない。その他に彼は多くの女を愛した。そのように、この青年はきわめて放蕩な生活を送っていた。しかし、日本の言葉のわかる異国のパドレ（オルガンチノのこと）から聴いた聖訓の条々が、彼の本能に哲学的考察の材料を与えて以来、別人のごとくになった。貴き御<sup>おんおきて</sup>掟の十のマンダメント（モーセの十戒のこと）のうち第六条「邪淫を犯すべからず」（第六条は第七条の誤り）を除いてくれるなら、すぐにもバプチスモ（洗礼）を受けようと申し出た。だがパドレはそれを許さなかつた。

パドレが去った後も、二人の女を同時に愛してはいけないという道徳律に恐れを覚えていた。これまた貴族の青年たちが今まで全く知らなかつた思想である。煩悶のはてに、信雄はその愛妾たちを捨てることにした。しかし、最後の一人を捨て去ることができなかつた。正妻より年上であり、家柄も立派ではなく、容貌も劣っていた。しかし、彼の心と交渉が深いのはこの女だけであった。この女によって彼は初めて人生の喜びを知り、また人生の愁いも知ったのである。

信雄はこの日、自分を教え導いてくれたパドレの船が着くのを待っている。そこに姿をあらわしたのが、その女であった。やがて、船が到着する。「黒衣長大の僧は、その魁偉<sup>くわいゐる</sup>なる顔面に絶えざる微笑を浮かべながら本船から舳<sup>はしけ</sup>へと乗りうつる。彼は浜辺に上がる。そして群衆に囲まれながら静々と歩を運ぶ<sup>しずしず</sup>」。主人公（杢太郎）にはそんな姿が目に見えるように想像された。そこで、突然、空想は終わり、現実世界に戻される。図書館が閉まる時刻の3時になったのである。「古都のまぼろし」のまぼろしのひとつがこれである。

主人公は図書館から出てセビーリャの街を歩くうちに、いつしかグアダルキビル川の岸に出る。イサベル2世橋から先は、「丁度深川のやうな処で、狭い道路の両側にせせこましく商家が立ち並んでいて。川に面したバル（スペイン独特の大衆的スナック）に席を取り、ビール一杯を注文する。図書館、古文書館、その内部の光景、そこに働く人々の姿が鮮明に思い出された。突然、一人の女性から、「ま



図5 セビーリアの町

たわたくし来ましたわ」と日本語で声をかけられた。それは、1923（大正12）年2月、イタリア旅行中にソレントのホテルに姿を現した幻の女であった。

筆者はすでに、壺太郎がソレントの宿で書いた「<sup>ヴェスヴィオ</sup>エスギオ遠望」という詩を評釈しておいたから、それを読めばこの女についてはイメージをつかめると思う（XIV. イタリア——義務の旅、参照のこと）。壺太郎がこの女と20代の頃に自分の書齋で初めて出会って以後、30代には朝鮮およびイタリアさらにスペインでも出会う機会があった。もちろん、現実の女ではない、幻の女である。これが「古都のまぼろし」のもうひとつのまぼろしなのである。この女と初めて出会ったいきさつを引用しておこう。

一体、ヨオロッパと限らず、自分が始めて彼女の女を見たのは、自分がまだ二十代<sup>だい</sup>の頃のことであつた。或雑誌の月々の評論を書く約束して、月の十五日、十七日の頃は、原稿が出来なくて転々煩悶した。この約束の一年が最後の一月を余した時、顔をしかめて卓<sup>つくさ</sup>に向かって居ると、始めて彼女の女は自分の書齋を訪れたのであつた。その時は彼の女もまだわかく、そしてその夜は黒い喪服を着けてゐた。少し吉井勇の空想めくが、その時、自分はこの女を現実の女と誤解して、真夜中<sup>おとづ</sup>に訪れられることに少し迷惑を感じたのであつた。然し少し会話を取交して居るうち、彼女の女の肉体を持つ女でないことが分つた。それで当時自分は彼女の女を呼ぶに「夜」といふ名を以てした。

画工の友人（木村莊八）と一緒に朝鮮慶州の古美術を見に行つたとき、この女は京城（現在のソウル）のホテルに姿を現した。その後ずっと久しく会わなかったが、イタリアのソレントで姿を現し、「今度はまたまるでエスバニア女になりすまして」セビーリャまで彼を追いかけて来たのである。女は昔の「夜」の時代（おそらく壺太郎20代のパンの会をさすのであろう）の批評家に帰って、次のような言葉を投げかける。「何の為にあなたはそんなむだ骨折をなさるの？」「およしなさい、つまらないわ。それは無益なヴニテエ〈フランス語で虚栄心〉よ。」

この文章から読み取れるように、この女は作者壺太郎の分身であり、これらの言葉は彼の自己批評であり内省なのである。壺太郎がスペインやポルトガルの図書館や古文書館で文献探索をしているときに、この女の言葉が頭に浮かんだとしても不思議はない。女は言葉を継いで、「だけど、そりやヴニテエばかりではないのねえ、あんたの場合は」という。さらに、主人公がマドリッドに来て、店のショーウィンドーに飾ってあるきれいな扇子を眺めて、買ったような顔をしていたことに触れて、次のように断言する。

「<sup>みんな</sup>だけどあの扇子はもとは皆日本から来たのよ。少なくとも骨や切れはね。あんたがマドリイでも、セギリヤでも、読めもしない古文書を漁つたり、本の表紙を写して

るるのは、わたしさう考へるのよ。あれはみんな、マドリイの扇子よ。」

韓国の比較文学者・<sup>イ・オリョン</sup>李御寧の『「縮み」志向の日本人』（講談社学術文庫、2007年）によれば、世界に普遍化されている文化のうち、日本のオリジナルなものはきわめてまれであるが、折り畳み式の扇子は日本のオリジナルだということである。してみると、「マドリイの扇子」はなかなか見事な自己批評ではないだろうか。マドリードやセビーリャの図書館や古文書館で、未発見のキリシタン文献を懸命になって探し出している自分を、別の自分が客観的に見つけている。その別の自分がこの女なのである。「マドリイの扇子」に対して、主人公は「おや、おや、随分きついね」とさらに言葉を返している。このへんはちょっとユーモアさえも感じさせる。

さて、この女の言葉による柰太郎の自己批評をさらに見ておこう。

「あなたの心<sup>とら</sup>を捉へるのは、エスパンアの産物でも、歴史でも何でもないので。無論真理なんて気の利いたものぢやいよいよないわ。唯日本的のものよ。あなたの胸中の古いサンチマンよ。」

「古いサンチマンとは？」

「少なくとも十年も二十年前のあなたの夢よ。」

柰太郎は自分自身に問うてみる。スペイン・ポルトガルの旅を続けていた自分の心をとらえていたものは、10年も20年前の夢だったのではないかと。いま自分が全力を挙げているキリシタン研究は歴史でもなければ真理でもないのではないかと。ただ、日本的なものに過ぎないのではないかと。これは他の人間には真似のできない自己検証の言葉ではないだろうか。

『えすばにや・ぼるつがる記』の「外篇」を読むだけでも、柰太郎のキリシタン研究は単なるディレタントの手すさびではないことがわかる。文学者としての感性と科学者としての厳密性が融合した歴史研究であり、柰太郎を語るときに欠くことのできない達成といえるだろう。それは、ここに見られる不断の自己批評から生まれたものなのである。最後にもうひとつ、この女の別れの言葉を引用しておこう。

「よしんば今後あなたが小説や、戯曲の創作をなされるやうな事<sup>おあり</sup>になつても、それは考証<sup>かうしやう</sup>とか<sup>おも</sup>術学<sup>げんがく</sup>とかが主になるもので、わたし〈ここでは文学という意味〉に対する強い信仰から出るやうなものでないのにきまつて居ますわ。あなたは好きな生物学者にでもおなりなさい。そして、余暇に小説も書くなどと世間の人に風評されてるの<sup>お</sup>がいいのですわ。」



これはまさしく、スペイン・ポルトガル旅行後、いやそれを含む欧米体験後における、医学者としてまた文学者としての柰太郎の生き方に関わるものである。執筆時、柰太郎は満39歳、まだ20年以上の人生を残していた。その後、ここで言われている生き方に近い形で人生を送ることになる。そんな重たい問題なのに、「夜」の女の言葉によって自己を戯画化しているところに柰太郎らしさもあらわれている。「古都のまぼろし」こそは、スペイン・ポルトガル旅行、なかんずくセビーリャでの体験がなければ生まれなかった作品である。ちなみに、この作品の後、同年に発表した「口腹の小説」と「安土城記」を最後に柰太郎は小説の筆を折っている。 (続く)

#### 注

木下柰太郎からの引用は主として、『えすばにや・ぼるつがる記』（岩波書店）に拠った。時に応じて『木下柰太郎全集』全25巻（岩波書店）と『木下柰太郎日記』全5巻（岩波書店）を参照および引用した。引用にあたっては新字・旧かなづかいとした。また、引用文において難しい読み方にはルビをふって（カッコ）に入れた。柰太郎自身のルビと区別するためである。さらに、引用文において注をつけるべき箇所には〈カッコ〉内に示した。

なお、図版はすべて柰太郎が旅行中に描いた絵である。

（本論文は愛知大学研究助成C-52を受けている）。